

講 演

“木離れ”する子供達

—木の教育現場から—(上)

北海道教育大学教授 金田 弘



21世紀は木材と森林にとって、どんな時代になるのでしょうか。

それを考へるには、子供達の現実に注目してみる必要がありそうです。

若い世代の木や森に対する姿勢を十分に理解し、早めにその対策を講じておかないと取り返しのつかないことになるかも知れません。

北海道林産技術普及協会の第32回総会（平成8年11月22日）では、「木材による教育」を専門に研究しておられる、北海道教育大学の金田弘先生に「“木離れ”する子供達 一木の教育現場から—」と題して講演を頂き、大変好評を博しました。

「ウッディエイジ」では特に先生にお許しを頂いて、2月号と3月号の2回に分けて誌上でその要旨を紹介させて頂きます。

講師紹介：

かねだ ひろむ

1937年 台北市生まれ

1963年 東京教育大学農学部卒業。

京都大学木材研究所助手,

北海道教育大学助教授を経て,
現在,

北海道教育大学教授。

農学博士。

専門は木質材料学、木材加工学

主な著書

「技術教育辞典」（共著）1983年、東京書籍

「木材と科学」（共著）1989年、海青社

「技術科教育実践講座、第2巻 木材加工」
(共著) 1989年、ニチブン

「もくざいと教育」（共著）1991年、海青社
「森のめぐみ木のこころ」 1996年、海青社

木と疎遠な子供たち

戦争が終わって50年になるわけですが、我々の生活は非常に豊かになりました。豊かになると同時に、生活環境も激しく変わってきました。昔ですとほとんどの人々が木造住宅に住んでいたわけで、縁側の下を捜しますと、どこの家庭にも木ギレの一つや二つはみつかりましたし、簡単なノコギリ、カナヅチを始めとする木工具の二つ三つは、どこの家庭にも用意されていたと思います。

そんなことで、子供達は小さい頃から、そういうものに親しまれて、色々自分の遊び道具を作るとか、学校で使う道具を少し作るとか、そんなことが、何の問題もなくできたわけであります。最近の子供達は、そういう生活とは全くかけ離れております。昔ですと、学校に行く前の日には鉛筆をナイフで削るといったことが大事な日課だったのですが、今ですともう、鉛筆を使うなどということはありません。子供達は鉛筆の代わりにシャープやボールペンを使います。食事をする時には箸を使うわけですが、これとても、最近の子供たちは、箸を使わないで食事をするのに一向に痛痒を感じないということになっております。そんなこと

で、子供達の生活に、木の出番がどんどん少なくなっています。今の子供達は木を加工するという体験はほとんど持っていないというのが現実であります。

木の加工性の良さは、私はそれを、天からの恵みと思っておりますが、いろいろな工具を使いますと、簡単に色々なものができてくるわけあります。稚拙ではあっても、自分の手を動かして、モノ作りをするということはごく普通のことでした。しかし、生活が豊かになり、生活環境も住環境も変わってきますと、私は本来子供達は「生活の創造者」だと思っておりますが、最近はそうではなく、残念ながら、お金を出せば何でも物が手に入るという生活になってきており、子供達が「生活の創造者」から、すっかり、ただの消費者に変わってしまった、ということができるのではないかと思っています。

同時にもうひとつ、非常に気になっていることは、子供達が自然との「ふれあい」を失くしてしまったということです。昔ですと、ちょっと外に出ますと、森や林もありましたし、雑木林ぐらいはどこでもみつかったのですが、これも生活環境が変わってしまったお蔭で、そういうものがどんどん身の回りから遠くへ行ってしまったわけです。

我々が対象としている木材材料というのは、森林で樹木として成育したものを、材料として使っているわけですから、森や林と無縁であるわけがないのであります。

大学生も

子供達ばかりではありません。私の教室に入学してくれる大学生たちあまり違いはありません。森や林に行ったことがないという学生が沢山いるのです。

毎年私は、六月のライラックが咲く頃になると、講義室からみえるライラックを指しまして、学生に「あの木は何という木ですか」と聞いてみます。

そのライラックを知らない学生がほとんどあります。私の大学は函館ですから、学生の内訳は、大体、北海道の出身者と本州の出身者が、半々ですが、残念なことに、北海道の出身者がライラックを知らないのであります。

秋になりますと、ナナカマドが赤く実をつけます。今度はこれを指して、「これは何の木ですか」と聞いてみます。ライラックよりももっと知りません。「ナナカマド」と答えた学生は今だにただの一人もおりま

せん。

函館には行啓通りという通りがありまして、駅の方から五稜郭公園に行く途中にあります。六月になりますと、ここにマロニエ（ベニバナトチノキ）の赤い花が咲きます。私にとって、毎日バスの窓から、それをみるのが朝の出勤の時の楽しみですが、学生たちもそこを毎日通っているので、「あれは何の花」と聞いても、「マロニエ」あるいは「とちのき」と答えてくれた学生は、残念ながら、今まで一人もいません。ですから、「木離れ」しているのは小学生や中学生だけではなくて、私の大学は教育学部ですが、そこに入ってくる大勢の学生は全くそういったことに「関心がない」のです。

木に関心がない

「関心がない」ということが、私は、物事がうまく行かないことの第一の前提だらうと日頃考えております。「興味」といったところに行く前に、「関心を持つ」ということが大前提になるのだろうと、考えているわけであります。子供達がすっかり“木離れ”をしてしまったわけですが、子供達ばかりでなく、大学生もそうです。

私は材料学とか加工学とか、色々の実験や実習の中で、木材材料を使うわけですが、残念ながら教育学部に入ってくる、次代の小学校や中学校の教育を担う学生達が、「これが何の材料か」とテストしてみると、ヒノキもスギもブナもケヤキも全く分からぬのです。返ってくる答の一番多いのは「ラワン」であります。何をみても「ラワン」であります。

私は半期の講義ですけれど、「木の文化論」というものを講義しております。そこで、色々な話をするわけですが、最近、自然環境教育の重要性ということが色々といわれ始めておりますが、「地球環境を大事にしよう」、それは非常に結構なことですが、次代を担う学生達が、森林の経済的な効用から、公益的な効用、こんなことを全く知らないのです。

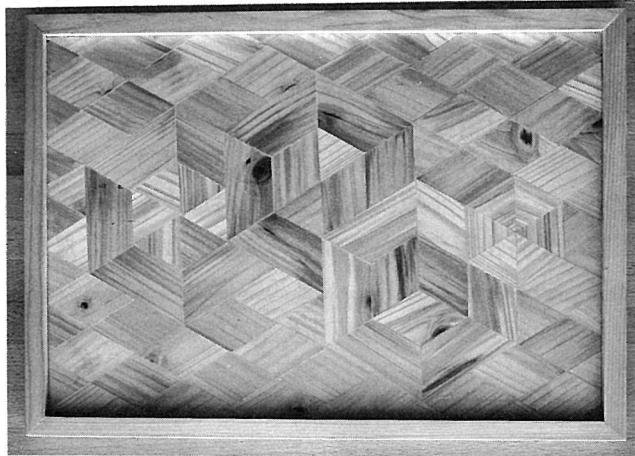
そんなことですから、先ず「関心がない」という所から考えていかないと、問題はちっとも解決しないのではないか、と最近つくづく思うようになっております。

子供達に不人気な「木」

木という材料、これは私達大人の世界ですと、20~

30年程前からでしょうか、「木の復権」というようなことがいわれ始めまして、「木の良さを見直そう、あまりにも鉄筋文化に取り囲まれてきた生活から、もう少し、それぞれが個性的に材料を選択して使うようにしようではないか」というような動きが出てきたのだろうと思っております。しかし、肝心かなめの子供達は、木材なんていうものは、「本当に古くさい、汚らしい材料だ」ぐらいにしか思っていないというのが現実であります。

私は、時折、学生たちを江差町に連れて行きます。そこは、北海道で最初に文化的に栄えた町ですから、



教材作品 1
着色したスギ小片を組み合わせたトレー(1)

ニシン御殿を始めとして、色々な古い木造建築をみることができます。そこに行きまして、例えば、ニシン御殿の梁をみると、ケヤキが随分大きな断面で使われています。ケヤキが一枚板で床板に使われております。等々、色々な発見ができます。そこで学生に色々と説明しますと、少し関心が出てきまして、それが興味につながって行くということになります。

しかし、付属の中学生がそこに研修旅行に行って、ニシン御殿を見て、最初に発した言葉は、「こんな汚い建物……」ということだったそうです。私たちが古いニシン御殿をみた時には、「実に理にかなった接合法をとっているものだ」とか「当時は良い材料があつたものだ」とか色々な発見があるのですが、子供達はそういうことには全く関心が無いのであります。

不器用な子供達

それでは、「これをどうしたら良いのか」、というのが、今日皆様方にお話したいと思っているところです

が、このような“木離れ”をした、つまり、「自分で手足を動かして何か、もの作りをする」、「そこで何か喜びを感じる」、「そこで、何か他の人と違った工夫をする」、こうしたことが、非常に少なくなってきたことと、自然との触れ合いが非常に少なくなったという、子供達の生活スタイルの変化が、どういうことをもたらせたかといいますと、彼らが全く不器用になってしまったということです。

そこで、参考のために、「不器用な子供達」という1980年に出ていた本の中から、「不器用さ」というのが、一体どんな所に現れているのか、ということを拾ってみました。

一番初めに出てくるのが、「鉛筆が削れない」ということがあります。鉛筆を使わないのですから、これは当たり前であります。学校教育は、これは考え直さなければならぬことですが、最近は危険なことがあれば、それを前もって、親や先生方が全部排除して行きますから、ナイフを使えなくなってしまいます。

我々の子供の頃だって、最初にナイフを使った時は、よく指を切ったものであります。そういったちょっと危険なことをやりながら、色々なことを学んで行くというのが、人間の自然の姿だと思います。

「鉛筆が削れない」、「リンゴの皮が剥けない」等々、いろいろなことがそこに書いてあります。「包丁が使えない」、「鋸が使えない」、「はさみが使えない」等々。要するに道具が使えないということであります。道具が使えないから豊かな世界は、道具が使えないから困らぬような生活のシステムを作り上げて行きます。

以下ずっとみて行きますと、「顔が洗えない」から「ボタンがかけられない」、「ひもが結べない」、「針に糸が通せない」、「雑巾が絞れない」。

これは要するに生活習慣のきちんとしたことが躊躇られないということだと思います。ひもが結べなければ、結べるように親が結ぶべきです。学校の教師がそれを学ばせればいいと思うのですが、豊かな世の中は“ワンタッチ”なんていう、ひもを結べなければ、ただ指で押し付けるだけで、靴を履けるようなものを開発するわけであります。

感性の喪失

「不器用」になったというぐらいで、まだ何とかカバーする方法もあるのですが、「これはちょっと

問題だな」と思うようになったのは、それは“木離れ”的結果だとは単純には結びつかないのではあります、 「不器用」から更に一段進んで、「感性を失つてきている」という、非常に恐ろしいことが指摘され始めていることです。これも、色々と生活のスタイルが変わってきて、木工作などをしなくなったということもその原因の一端だと思いますが、これは人間にとつて、由々しきことしかいふ他ないのであります。

感性ですから、視覚、聴覚、嗅覚、触覚、味覚、といった五感が先ず中心になるわけですが、その他に、感情とか、認識力だとか、創造力だとか、共感性とか、人が人間らしく生きるために必要なことをひっくるめて感性といふいふ方をしますと、生活経験の不足が、最近になって、ここまで問題を深刻化させてしまったということになります。

考えてみると、人の五感を、全部センサーが代わりをしてくれるという、確かに便利な生活ですが、果たしてこれで、次代を背負って行く子供達がこの先、まつとうな人生を送つて行けるのか、という疑問を強く感じるわけであります。

体験がない

それでは子供達がどんな体験をしてきたかということを、ある年に、私の研究室の学生が教育実習を行つて、ある中学校の1年生に、アンケートをとりましたのでそれを御覧に入れます。

「中学校に入る前にどんな体験をしてきたか」を聞いたものです。「中学校に入つてくるまでに、木を使って、何か『モノ作り』をした経験はありますか」に対しては、ほぼ50%が「ある」と答えております。これは、残りの50%は、そういうことと無縁に生きてきているということであります。

それでは、「のこぎりを使ったことがありますか」に対しては、これはほとんどの生徒が「使つたことがある」と答えています。「使つたことがない」生徒は約1割であります。「かなづちを使ったことがありますか」に対しては、これも4分の3の生徒は経験を持つております。逆にみると4分の1の生徒は「かなづちを使ったことがない」ことになります。これに対して、「かんなを使ったこと」に対しては、これは「ない」というのが半分であります。

そのほか、「木で何かを作つてみたいですか」という問い合わせに対しては、半分の生徒は「そんなことに関心

がない」という結果が、このアンケートから分かります。これが今の小学生、中学生の最大公約数と判断して、大体間違いないと思います。

「柔らかいものの視点」

小学生や中学生、あるいは大学生までこのような実情にあるということで、幸いなことに、世の中には、皆様方のご尽力のお陰で、かなり、木材材料だと、木でできた色々の生活用具に、かなり関心が集まつてきております。

私の、今から30年前の学生時代には、樹木だと、木材材料だと、木の加工だと、でき上がつた木製品だと、そういったものに関する参考書は若干はありました。それが、オイルショックの昭和48年、あるいはその前の年頃からボツボツ現れてまいりまして、そのトップバッターが、小原二郎先生がお書きになつて、鹿島出版会から出版された、「木の文化」という本だったと思います。それから、NHKから出版され、奈良の宮大工の西岡さんと、小原先生がご一緒にお書きになつた「法隆寺を支えた木」という素晴らしい本がありますが、その他に最近も沢山出ています。私もそういう書物を、この20年程、研究室に集めてみたのですが、大体80冊ぐらいになりました。このような、色々な「木に対する思い」が、応援団になっていると思うのですが、そういうものが、ひとつの役割を果たして、木に対する見直しが始まつてゐることは事実だと思います。

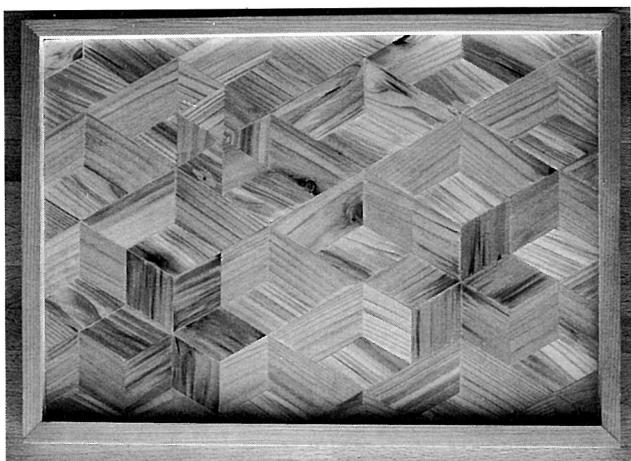
しかし、残念ながら、小学生、中学生から大学生まで含めて、そういうところからはかなり無縁で生きているという、これもまた現実であります。

それで「柔らかいものの視点」から木の教育を考えてみては、と考えました。「柔らかいものの視点」とはどういうことか、といいますと、これは今から10年前に東京大学の生産技術研究所の村松先生という、建築史をご専門にされた方がお書きになつていたことです。

戦後50年、一生懸命に走つてきて、近代化が進んできましたが、近代化の中身は一体何かと考えてみると、例えば、ものを生産するということから行きますと、ひとつは「非常に高速で生産できる」、「大量に生産できる」、均質なものが一時にできる」。そういうことから世の中は、当然のこと、標準化、規格化と

いう方向に進んで行く、そして「みんなが同じものを使う」、そういうことになってくるわけであります。ということはどういうことかといいますと、お互いの生活の幅が非常に狭くなってきて、変化が少なくなっている。いい換えれば非常に「固い」ものになってしまっている、ということであります。ところが、樹木や木材材料を考えますと、ここで、一番固くなりにくかった材料が樹木であり、木材材料ではなかったかとおっしゃるわけであります。私も誠にその通りだと思います。

要するに、昔から、大工さんの仕事だと、木を使う職人の仕事は、樹木それぞれの個性の違いを巧みに使い分けて、それを生かすことを以て仕事の特徴としてきたわけであります。だから、これから的生活の進歩の目標を「個性」だと、「多様化」だとを追求することに置くとすれば、また、それを「豊かさ」の中身だとすれば、それは「柔らかいもの」という定義で、世の中の生活を考えて行くことが必要ではない



教材作品 2
着色したスギ小片を組み合わせたトレー(2)

のか、そんなふうに村松先生は述べておられるわけであります。

我々の生活もそうですが、教育の目標もどうも「固くなる」ということに中心が置かれてきたような気がします。これだけ大学生も多くなり、大学への進学率も年々高くなるわけですから、世の中の動きは、ますます「固くなる」のは避けられないのかも知れませんが、学校の教育を、もう少し幅をもって、色々とバラエティに富む、つまり、北海道は北海道の特徴を生かした何かがあり、東京は東京で、関西は関西で、それぞれ特徴のある教育が、これからは必要ではないか、

そんなふうに感じるわけであります。

そういう教育を実践するためには、樹木を使う、木を使う、そういうことが是非必要ではないか、それによって個性化だと、多様化だと、そういうことが、いささかなりとも実践できるのではないか、最近は、そんなふうに考えております。

個性を育てる

最近、学校で色々唱えられていることが、「個を生かす」とか「個性を重視した教育」とかであります。それは誠に結構ですが、どうも、お互いにやっていることが、非常に幅の狭い所に収まってしまっている。どうもそんな気がしてなりません。こういう時代になってしまったからこそ、もう少し木を使って、いろいろなことが、やれるのではないか、そんなふうに最近、思い始めているわけであります。個性の喪失は、子供達、学校、学生、だけのことでしょうか、そういう大人たちの生活にしましても、お互いが個性的かというと、どうもそうではないようであります。ちょっと前に、佐高信さんという、評論家が、いかに日本人が個性を殺しているか、ということを、皮肉混じりのジョークで、北海道新聞に書いておられました。

ある豪華客船が、座礁して、沈没の危機に見舞われました。大人も子供も女性も大勢乗っておりましたが、乗客の国籍はさまざまで、日本人ばかりでなく、アメリカ人も、イギリス人も、ドイツ人もイタリア人も乗っていたそうです。ボートは一隻しかなくて、先ず女性、それから子供達を乗せなければならぬわけであります。男性たちは、海中で、助けがくるのを待たなければならないわけですが、その時にその豪華客船の船長はどういう処置をとったかということを、ジョークで書いているわけであります。

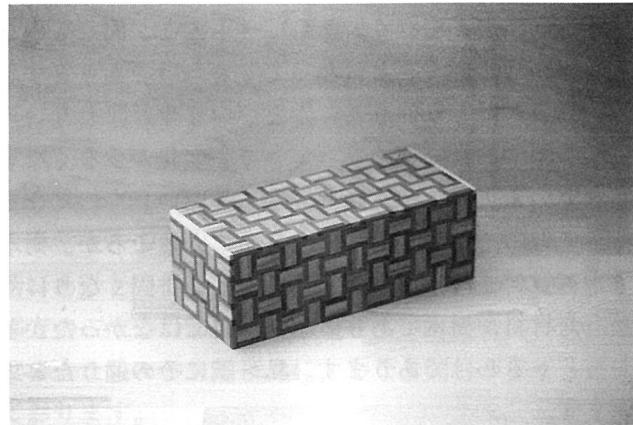
船長はアメリカの男性に、海に飛び込むことを説得する時に、「貴男には保険が掛けてあるから」といえば飛び込んでくれる。ドイツ人には、「こういう時には飛び込むのが規則だから」といえばいい。イタリアの男性には「飛び込むな」といえば飛び込んでくれる。イギリス人には何というかというと「紳士は飛び込むものである」といえば飛び込んでくれる。最後に、日本人にはどう説得するかというと、「他の国の男性諸君はみんな飛び込んでくれた」ということだそうです。

そんなことがいわれるぐらいですから、個性の喪失

については、生徒や学生達のことばかりもいっておれないのかも知れません。我々大人の世界でも、そうかもしませんが、やはり、これから「豊かさ」というものが、「個性を生かす」とか、「多様性をもって生きる」ということだとしますと、教育の面でも、もう少し樹木だとか、木材材料だとか、そういういたものに目を向けて行く必要があると、そんなふうに最近考えているわけであります。

それでは、このような現状を、どのように変えて行けば良いのか、実際の小学校や中学校の教育というのは、一体どんなふうになっているのか、話題をそちらに移して、お話をさせて頂きたいと思います。

—以下次号—



教材作品 3
積層したスギ辺・心材から採った小片を組み合わせた小箱(1)

北海道の木材技術情報誌

「ウッディエイジ」を読みませんか

北海道林産技術普及協会では只今、新会員を募集していますので、ご紹介してください。

「ウッディエイジ」には、北海道立林産試験場の研究成果の最新情報をはじめ、北海道の地域特性を重視した、実践的な木材技術情報がいっぱいです。

※詳しい入会手続きについては、下記にご照会ください。

〒071-01 北海道旭川市西神楽1線10号

社団法人 北海道林産技術普及協会

☎ (0166) 75-3553

FAX (0166) 75-3553